

小酒井さんのことども

国枝史郎

青空文庫

小酒井さんが長逝されました。私はボンヤリしています。同じ名古屋に住んでいたため特に親交があつたからです。

医学者として大家であり、探偵文学者として一流であつたことは世間周知のことと思いますが、私の知っている幾人かの実業家は小酒井さんのことをこのように申して居りました。

「小酒井さんは大事業家の素質を持っています。あの人が病身だということは如何にも残念です。健康でさえあつたら実業の方面でも大事業をされるのですに」と。

小酒井さんは、ひそかに或る土地会社式、乃至は宝塚式ないしの大娯楽場設立の計画をされていたようです。或時その片鱗を私にも洩

らされ「いよいよその時には貴郎あなたにも是非」とこのように云われました。五六十万円ぐらいの計画のようでした。

そこで私は思った事がありました。

「小酒井さんが夭逝しなかつたら、医学界では、自宅に設けてある研究所から多くの博士を出して一大王国をつくり、探偵文学方面では、息をかけた人を多く造つて一大王国をつくり、実業方面では前記の計画を完成してこれ又一大王国をつくったことであろう」と。

小酒井さんが私の家へ来られた度数と、私が小酒井さんの家をお訪ねした度数とを比較しましたなら、小酒井さんが私の家へ来られた度数の方が多かったように思われます。来ると、何時いつも文

学の話ばかりで、それが小酒井さんには^{たのし}しみであつたようでした。他にそういう話をする人が名古屋に無かつたからだろうと思われ
ます。

小酒井さんは身に備わっている威厳を、わざと自身でぶち壊
うと心掛けるような所がありました。しかし^そ夫れは失敗に終わり、
いつも威厳が保たれていました。実に壊わしても壊わしても壊わ
し切れない頑丈な威厳を持っていました。

小酒井さんは場所慣れた人であり、何人にも臆^おめない人であり、
どのような環境にも融合することの出来る人でした。

小酒井さんは三十分でも一時間でも人の話を聞いて、自分では
黙っていることの出来る人でした。それで少しも小酒井さんの影

が薄くもならず、いや却かえつて小酒井さんという人の印象を強く人に与え、尊敬を招く人でした。

知ったか振りをしないばかりか、一切のことに小酒井さんは見得を張りませんでした。余程の修養が出来ていなければこういうことは仲々出来ないのだと私などには思われました。

衆と共に仕事をされる場合には小酒井さんは身を以もつつて率ひきいました。ですから自然と衆人が小酒井さんを頭目しまの位置に据えていました。

私に断然禁酒をすすめたのは小酒井さんでした。

小酒井さんを「よく取りよく散じた人」と云い度たいのですが、そうは云われないようです。小酒井さんは原稿料無しの原稿を平

気で沢山に書き、極端に安い原稿料の原稿をも平気で多く書きま
した。で「よく取らなかつた人」でした。しかし散じた方はいち
じるしく、これは随分派手でした。

肺を非常に悪くしている、貧しい青年の原稿を小酒井さんは買
い取つてその青年の生活を助けてやつていたということを、数日
前に、その青年から私へよこした手紙によつて私は知りました。
しかもその原稿によつて小酒井さんは創作の材料を得たのでは無
く、その原稿は全然紙屑籠の中へ入れるていのものであつたそう
です。小酒井さんはこういう隠徳を施していた人でした。

私が禁酒したのは、酒をうんと飲みそこへカルモチンをうんと
飲みⅡ糖尿病があつた所へ、それらのものを、うんと飲んだ^たため

悪く影響し、一種の夢遊病的状態になり、一つの失敗をしたのを小酒井さんが心配され、全然禁酒するよう進められた結果禁酒したのでした。それは去年の十二月のことでした。それ以来私はずっと禁酒しています。この禁酒はつづくようです。ところでその際私は或る手続をするために小酒井さんに保証人になって下さるよう依頼しました。すると小酒井さんは直ぐに快諾された上、その手続きをする事を非常によいからと云って進められました。

しかしその時小酒井さんは云われました。「喜んで私は保証人になります、しかし貴郎よりも先に私の方がこの世へお暇いとまを告げますよ」と。

私はまさかと思いましたが、遂ついに小酒井さんの言葉が眞実にな

りました。

^{かなし} 悲いことです。

私が、生前の小酒井さんと逢ったのは、本年一月の耽綺社の例会が最後でした。その時私は禁酒したのと旅から急いで帰って来たのとでシヨンボリしていた筈です。私のシヨンボリ振りが会員の人達に眼立めだったと見えて、その後土師清二氏からも長谷川伸氏からも「国枝よ。あんまりシヨンボリし過ぎる。大酒は不可いないが少しは酒をやった方がいい」という手紙が来たくらいでした。しかし私はその手紙を見て思ったことです。「禁酒したためシヨンボリしたのは事実だが、実はあの時小酒井さんが私の正面に坐わっていて絶えずチラチラと私の顔を見て、私が盃へ手をやるか

どうかと心配そうにいられた。その小酒井さんの心配そうな顔に対しても、盃を取ることが出来ず、又、実際よりも一層ションボリした風を見せなければならなかったのだよ」と。

その日には、大毎の渡辺均氏や、大竹憲太郎氏も出席していられました。が、私のションボリ振りには意外な思いをされたことだと思えます。その日私は郊外電車の時間の都合があつたので一人中座して帰宅しました。尤も私だけ中座して早く帰宅するといふ意味のことを旅先から予め小酒井さんの所へ手紙で申し入れて置きました。私が中座して縁まで出ると、小酒井さんが縁まで送つて来られて、小声で尚なおいろいろと注意をして下さいました。その後、家内が小酒井さんの所へおうかがいすると、小酒井さんは

云われたそうです。「国枝さんに禁酒をおすすめしたが、あの性質のことですから、せいぜい節酒するぐらいに止まるものと思っていた所、耽綺社の会合の時一吸も酒を飲まず、本当に禁酒したのを知って喜びもし安心もしました。いざとなると意外に意志が強いのですね。今後はコクテールであろうと、みりんであろうと、酒の名の附くものは一切飲ませないようにして下さい」と。

×

小酒井さんのことに関しましては私には書く可きことが山ほどあります。期を見ていろいろ書くことにします。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社
2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「猟奇」

1929（昭和4）年6月

初出：「猟奇」

1929（昭和4）年6月

入力：門田裕志

校正：Juki

2014年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小酒井さんのことども

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>